

クローズアップ  
CLOSE UP

星に見る被災者の思い

3月9日と10日、児童文化センターでプラネタリウム「星空とともに」を上映しました。東日本大震災の大停電時に被災地を照らしたのは、見たこともないような満天の星。当時のエピソードとともに映し出される星空を眺めながら、被災地に思いをはせました。



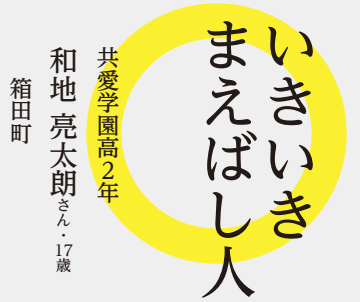
発明は日常生活の中から

第77回全日本学生児童発明くふう展で出展した「車椅子がはまらない踏切安全システム」が発明協会会長賞に輝いた和地さん。同展で同じく受賞を持つ姉の影響もあり、小3の時に児童文化センターの発明クラブに加入。ものづくりの楽しさに目覚めた。「車椅子の安全システムについて考えたのは、車椅子利用者が踏切の溝にはまり事故に遭ったニュースを見たのがきっかけでした。父が病気で一時的に車椅子に乗っていたことがあり人ごととは思えなくて。最初は車椅子の改良を試みましたが、普及に時間がかかりそうだと思い、車椅子より数の少ない踏切を改良する考えに変えて構想を練りました」

発明のアイデアは日常生活の中で生まれる。「日常生活でも、ここをこうしたら合理的なんじゃないかと考えることがあります」

鋭い視点でアイデアを生み出すが、受賞については「実感が無かったけれど家族がすごく喜んでくれました」と、はにかむ。

学校ではボランティア部に所属し、小学生の学習指導やあしなが学生募金活動の手伝いなどに取り組む和地さん。発明や優しさで多くの人を助けていくことだろう。



交通手段の未来考える

3月9日、前橋テルサと群馬会館で「人と環境にやさしい交通を考える全国大会in前橋」を開催。高校生による提言発表や水戸市・宇都宮市・本市の交通状況のパネル展示、ディスカッション、来場者との意見交換などを行い、公共交通の役割を見直す契機となりました。



暮らしに密着  
工科大 LABO

最終回  
前橋工科大  
☎ 027-265-0111

今回は  
総合デザイン工学科です



前橋工科大は、科学と工学で生活を快適に、安全に、そして持続可能にすることを目指しています。このコーナーでは、日々行っている研究内容や暮らしに役立つ豆知識を各学科から紹介。今回は総合デザイン工学科の長谷川一美教授がお届けします。

総合デザイン工学科では、プロダクトデザイン、スペースデザイン、情報デザインの3つを柱としたものづくりの手法を学び、工学に基づいた本質的なデザインを創造できる技術者の育成を目指しています。

世の中に形として存在するものが全てがデザインされています。作り手は意思を持って作り、それを受け手である私たちが見て、デザイン性を評価することになります。では、私たちはど

魂の朗読に震災思う

3月10日に前橋文学館で「これから生きるために・詩の礎」を開催。東日本大震災を詩で発信し続けた福島県在住の詩人・和合亮一さんが、講演と迫真の詩の朗読を行いました。また、福島の人たちに向けたオリジナル曲の演奏も実施。震災とこれからを考えました。



のように評価するのでしょうか。美的感覚は十人十色、人それぞれ異なります。例えば臨江閣を昼に見ると、歴史ある和の趣を感じます。しかし、夜にライトアップされた姿を見ると、打って変わって幻想的な雰囲気を感じられるのではないのでしょうか。

このように、同じ形の物でも光の加減（朝日、夕日、ライトアップなど）や背景、素材の違いなどの差で、全く違う印象を受け手に与えます。一口にデザインといっても、さまざまな要素が絡み合っており、時に相乗効果を生みながら美しさを演出しているのです。単純に形だけでは評価できないのです。デザインは大変奥深いものですね。



昼と夜で印象が変わる臨江閣